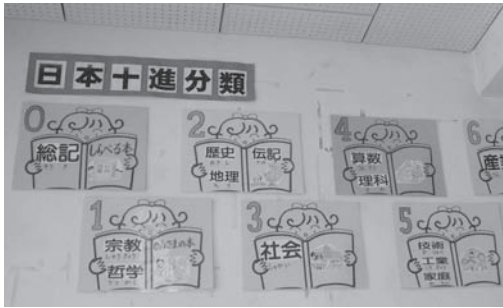


# 読書ができる子どもをばぐくむ学校図書館

東京学芸大学  
渡辺 暢恵

学校図書館はあらゆる教科と関連があり、読書の力は、国語だけではなくすべての教科でつけていくものである。そのためには、司書教諭の計画と全教諭の実践が必要である。

## 1. NDCを教えるオリエンテーション



学校図書館は、大きな事典だと考えるとよい。そのためには、探すことができるシステムが必要である。国語辞典が五十音順に並んでいるように、学校図書館には、日本十進分類法(NDC)とい

う並べ方が多く用いられている。

教科別などの配架は、担当者が替わると分ける観点が曖昧になってしまうので、異動の多い公立の学校には不向きである。NDC順に並べてあることは、児童・生徒はもとより職員全員にわかってもらわないと、活用できず、並べ方を維持できない。そのために、年度初めに行われるのが、学校図書館の使い方のオリエンテーションである。NDCの説明



だけではなく、何冊、どのくらいの期間借りられるのかをここで確認する。そして、本を借りる練習をさせるるとよい。学校司書(教

員ではなく、学校図書館専属の職員)の配置されている学校、司書教諭が専任または司書教諭の時間が確保されている学校では担任とチームティーチングで実施することをすすめたい。児童・生徒が、学校司書や司書教諭に親しみ、今後、質問することができるようになる。

オリエンテーションを実施し、本の並べ方をしっかりと覚えると、どの子も本を大切にできるようになり、返却もきちんとできるようになる。

## 2. ブックトーク

オリエンテーションや読書指導の際は、学校司書や司書教諭に、ブックトークをしてもらうとよい。担任、各教科の教諭にも実施していただきたい。ブックトークとは、一つのテーマで何冊かの本をすすめる方法だが、先生には、多くの本を選んで読む時間はないので、一、二冊でもよい。大好きな先生にすすめられた本は、子どもたちが関心をもつ。紹介したときには借りなくても、心に留めて、いつか手にとってくれるものである。

一番の読書環境は「人」である。まず、教諭も含め、周りの大人が「こんな本がおもしろい」とすすめることが大事である。

次の写真は、千葉県柏市の学校図書館指導



員、国貞さんと子どもが、六年生にブックトークをしているところである。高学年になると本を読まなくなるというの

間違いで、このように心をこめて語りかけると、どの子も読んでみたいと思って、本を手取る。ブックトークに使用した本は、必ず数人が読みたくるので、冊数の多いシリーズの中から一冊を入れておくと、すすめた以外の本も借りられるようになる。

### 3. 授業中の読書指導の禁句

授業中の読書指導の禁句は、「好きな本を読みましょう」である。意外に思われるかもしれないが、授業中であれば何かめあてをもたせるのは当然のことである。例えば、体育の授業で、校庭に出て「好きな運動をしよう」とは言わないように、学校図書館で授業をする際は、その教科の目標に照らして、発達段階、単元に合わせて、めあてのある読書

をさせるべきである。

高学年では「教科書で学習した物語の作家の本を読みましょう」低学年では「最後までしっかりと読みましょう」など。詩の学習をしているときには、学校図書館の詩の本を読んで、好きな詩をノートに視写すると、学習に広がりがある。

写真のブックトラックには、「楽しい本を一冊、しっかりと読みましょう」（小学校二年生の三学期）というめあてに合わせて、おすすめの本が並べてある。「学校図書館の中の好きな本を読みましょう」とすると、選べなくてウロウロしてしまう子も、このようにすると落ち着いて読むことができ、効果的である。



### 4. 読み聞かせだけでは育たない

読み聞かせは、児童・生徒を物語の世界に引き込む効果的な方法である。読み手と聞き手が一体となった時間を共有し、心を豊かにする作用があり、これを味わわないと読書への興味をもつことは困難である。

しかし、読み聞かせだけでは、自分から読めるようにはならない。小学校の二年生までは、読み聞かせした本をまた、自分で読みたいと思うので、同じ本、またはシリーズを用意しておいて、一人ずつに持たせられるようにし、自分で読めるように時間をとる。

小学校三年生以上は、読み聞かせをブックトークの一つとして導入にして、関連するテーマの本を人数分用意し、読む時間を確保する。朝読書の時間をこのように活用している学校もある。

いずれにしても、指導に使う目的の本をあらかじめ購入しておく必要がある。学校図書館は、公共図書館とは違い、学年の目標に合わせた選書の目が求められる。一冊ずつ違う本を購入するだけではなく、必要に合わせて複本にすること（複数購入すること）も考える。

そのために準備するのが、学校図書館の本を利用する年間計画である。どの時期に何年生がどんな読書を指導課程に位置づけるか、司書教諭または図書担当教諭が中心となって案をつくっていただきたい。

わたなべ のぶえ 東京学芸大学非常勤講師。著書「子どもの読書力を育てる学校図書館活用法」（黎明書房）『学校図書館入門』（ミネルヴァ書房）ほか三冊。